

「同じ目の高さ」二様

私たちの老人ホーム任運荘のある日の訪問者は青年であった。彼女は京都の某大学生で、拙著「老人ホームはいま」が福祉のテキストであるので、見学したくて来たという。

旅の車中で折った紙人形五十個をお年寄りに一人ずつといねいに手渡し、ベッドに横たわる人にはひざまずいてさしあげている。老人たちの目の高さを十分意識した優しいぐさである。いま時の若い者というが、「後輩まことにおそるべし」。その時のさわやかな思いが、今も心窓を去来する。

近ごろ見た県広報誌五月号の「現代子ども考」の一節に、それと似て非なる座談教育論を見て、一言いいたくなった。要約しよう。某指導者は「子どもと話す時は子どもの目の高さまで自分の体をかがめなくてはいけない」と教える。聞き手も答えて、「むしろ子どもよりも下に降りてもいい。私がヘマをしたりするもんだから、かえって子どもがしっかりしてくる」などと、手放し状態である。

普通の子が相手なら、子の目の高さなどに合わすほどのことはない。大切なのはお手本なのだ。下村湖人の言葉を思い出す。「子どもは大人のまねをする。しかるに、世の親たちはご苦労にも、子どもに自分のまねをさせまいとして、いつも苦労し、それを教育と思いちがいをしているかのようである」と。

お手本、だからといって、親が完全な鏡である必要はない。不完全であっても人間性を深く自覚する親であればよい。そこに謙虚な親はあってもごう慢な親はない。自分の人間的弱点を自覚しつつ、正しく生きんと苦闘する親の後ろ姿こそ重要なのである。

親もまた、期待をかけるわが子どもとともに、人生不断の修行者でなければならぬとする自覚。この自覚から生まれる親のあり方が、子への一切を決定する。

(一九八一年七月一日)